

遼代朝陽北塔に関する考察

A Study on the North Pagoda at Chao-yang (Chaoyang-Bei-Ta) in Liao Dynasty

水野 さや

MIZUNO Saya

1. はじめに

遼寧省朝陽市老城区に位置する朝陽北塔（図1-1）は、方形十三層の磚塔であり、現状において高さは42.6mを誇る。第二層以上の塔身が狭く、各層の軒がせまったいわゆる密檐式の磚塔である。

朝陽北塔が位置する朝陽地域は、古くは燕の都竜城が置かれたところであった。北魏代に営州となり、都からは離れたが、馮皇太后など、燕出身の漢民族は政治に影響を持ち、軽視できない地域であり続けた。営州は隋・唐代においても東北経営、東北方面の異民族に対応する拠点であり、高句麗・契丹など、唐が征服した北方民族の幽閉地ともされた¹。営州を拠点に、高宗・則天武后後に契丹族出身の豪族李尽忠（?～696）が反乱を起こし、一時的に「大契丹国」と号したこともあった。

また、1980年代に行われた発掘調査により、朝陽北塔は北魏代の木塔を始まりとし、隋代に重修され、唐代にも磚塔として重修されたことが明らかになった²。さらに、遼代には、10世紀および11世紀中頃に続けて修理が行われており、天宮および地宮より出土した多くの埋納品は、重熙十一年（1042）から同十三年（1044）の重修時に、来たるべき末法に備えて再葬されたものであった。

このように、朝陽は、遼代において東京地区の中心的地域であり、歴史的にも東北地域の重要な拠点の一つであり続けたことから、また、塔の創建からの沿革が比較的たどりやすく、塔内納入品より遼代重修の意図が明確であることから、遼の仏教文化を考察する上で地域ごとの特徴の把握が必要と考える

筆者にとって、本塔を考察する意義は大きい。

これまで朝陽北塔については、第一層塔身に四仏をあらわすことから「金剛界立体曼荼羅」と理解され、同じく八大霊塔をあらわすことから「舍利莊嚴」「舍利信仰」の側面において考察がされてきた³。また、朝陽北塔が遼塔としては珍しい方形磚塔である理由を、北魏の木塔、唐の方形磚塔を囲い込む形で増築されたためと理解されてきた⁴。本稿は、これら先学の研究に沿いながら、第一層塔身部の浮彫モチーフをあらためて確認し、背後に遼宗室およびこの地に居住する漢民族・渤海遺民の双方からみた（五台山信仰を集約した）「仏頂尊勝陀羅尼」信仰があり、その具現化（造形化）にあたり『大乘本生心地観経』を用いることで両者の側面を含有させながら、最終的に「末法」への備えを強調することで一致・統合された可能性について考えたい。

2. 朝陽北塔第一層塔身における

浮彫モチーフ — 四仏と八大霊塔 —

遼・金の仏塔は、基壇から塔身に掛けて多くの浮彫モチーフをあらわす塔が多い。しかし、大半が密檐式仏塔であることから、第二層以上の塔身部に浮彫尊像をあらわすスペースはあまり確保されず、宝塔、雲文などの同一モチーフなどにとどまる場合が多い。万部華嚴経塔（白塔、内蒙古自治区呼和浩特市、図3）などの楼阁式の磚塔もあるが、第二層塔身以上には、慶州白塔（内蒙古自治区巴林右旗、図5-1・2）のように、宝塔、神将像、供養天像、供養比丘像などの同一モチーフが反復してあらわ

されることも多い。また、基壇部については、まずは保存状態の問題が大きく、大半は明・清ないし近年に修理がなされていることが多い。そのため、第一層塔身部の浮彫は、塔の特徴を表す最も重要な部分といえる。

朝陽北塔第一層塔身の各面には、それぞれ生霊座（鳥獣座）に坐す宝冠如来形如来坐像を中心に、左右に蹲踞する供養菩薩像、その左右に宝塔（方形十三層）をそれぞれ配し、如来像と左右の宝塔の上にそれぞれ天蓋がかかげられる。各天蓋の上部には、降下する飛天があらわされる。供養菩薩像の持物はいずれも香炉と華盤の組み合わせである。各面中央に位置する如来坐像と宝塔については以下の通りである。

南面（図1-2）

如来像は、当初は五頭の馬を伴う蓮華座上に結跏趺坐し、左手は腹前において拳を握り、右手は与願印を結ぶ。

左右の宝塔は、いずれも塔身内に仏坐像をあらわす。左塔の位牌型区画内に「浄飯王宮生処塔」（図1-6）、右塔の同区画内に「菩提樹下成仏塔」（図1-7）と刻銘する。

西面（図1-3）

如来像は五羽の孔雀を伴う蓮華座上に結跏趺坐し、両手は腹前において第一・二指を捻じて定印（弥陀定印）を結ぶ。

左右の宝塔は、いずれも塔身内に仏坐像をあらわす。左塔の位牌型区画内に「鹿野苑中法輪塔」（図1-8）、右塔の同区画内に「給孤独園名称塔」（図1-9）と刻銘する。

北面（図1-4）

如来像は五羽の金翅鳥を伴う蓮華座上に結跏趺坐し、左手は腹前において拳を握り、右手は施無畏印を結ぶ。

左右の宝塔は、いずれも塔身内に仏坐像をあらわす。左塔の位牌型区画内に「曲女城辺宝階塔」（図1-10）、右塔の同区画内に「著閣崛山般若塔」（図1-11）と刻銘する。

東面（図1-5）

如来像は五頭の象を伴う蓮華座上に結跏趺坐し、左手は腹前において拳を握り、右手は触地印を結ぶ。

左の宝塔は塔身内に維摩居士像をあらわし、位牌型区画内に「菴羅衛林維摩塔」（図1-12）、右の宝塔は塔身内に涅槃仏像をあらわし、同区画内に「娑羅林中円寂塔」（図1-13）と刻銘する。

（1）四仏

以上のように、第一層塔身にあらわされる如来坐像は、南面は台座に馬を伴い与願印を結ぶことから宝生如来、西面は台座に孔雀を伴い定印（弥陀定印）を結ぶことから阿弥陀如来、北面は台座に金翅鳥を伴い施無畏印を結ぶことから空成就如来、東面は台座に象を伴い触地印を結ぶことから阿閼如来とされる。このことから、中央を大日にみだてた金剛界立体曼荼羅との理解がされ⁵、遼代の仏教信仰の中に密教がある根拠にもされてきた。ここには遼における密教の需要が前提となっており、禅、華嚴、浄土の諸信仰の混在についての言及もなされている。確かに、大蔵経の編纂が行われ、その後の高麗大蔵経の編纂に影響を与えるほど、遼の教学が諸宗に通じていたことは間違いない。

しかし、これらの如来像にみられる印相は、遼代の単独の仏像にもみられる一般的なものでもあり、手印のみでは特定の尊格の同定がし難い作例もある。また、中京大塔（内蒙古自治区赤峰市寧城県、図8-1~4）、広勝寺塔（遼寧省義県義州鎮）、崇興寺東・西塔（遼寧省北鎮市広寧鎮）、広濟寺塔（遼寧省錦州市古塔区）など⁶、八角多層塔において、第一層塔身の浮彫尊像のなかに智拳印を結ぶ如来像（南面）を含め、八体を構成する塔が多い。この如来像が毘盧遮那ないし大日如来であるならば、本来は中央に配置されるべきであり、外壁に出てくることはないであろう。このことから、厳密に「金剛界立体曼荼羅」という意識を持っているのかどうか疑問が感じられる。

ここで、以下の二例について触れておきたい。第一に、朝陽地区の遼代墓より出土した石函（朝陽市博物館所蔵、図10-1・2）である。本石函には、

南面（正面）に門扉と朱雀、他の三面に青竜、白虎、玄武をそれぞれ刻出し、石函上面には、蓮台上に九つの種字が配されている。梵語の字体とはやや異にするが、大日如来とみられる種字を中心に、観音、弥勒、虚空蔵、普賢、金剛手、文殊、除蓋障の各菩薩の種字を順に配するものと思われる。これは、不空訳『仏頂尊勝陀羅尼念誦儀軌法』（8世紀後半）に説く、中央の毘盧遮那仏の周りに配される八大菩薩と同じである⁷。このような石函に荼毘に付した遺骨を納め、方形ないし円形墳に埋葬することから、現世における除滅業障増福延命を祈願する尊勝陀羅尼の功德が、死後にも継続するものないしは浄土・天界への確実な往生に対しても効力があるものと認識されていたと考えられよう。

第二に、第一層塔身に八大菩薩像を浮彫する八稜観塔（遼寧省朝陽県太平房鎮、図11-1・2）である。後補像に置き代えられている尊像も一部あるが、金剛手（東北面）、文殊（東面）、除蓋障（東南面）の尊像と配置順を確認することができ、『仏頂尊勝陀羅尼念誦儀軌法』による八大菩薩を形成していた可能性がある。

このように、石函においては中央に位置すべき種字は中央に位置し、八稜観塔においては中央に位置すべき尊像は外壁には表現されない。このことから、遼中期以降の八角多層塔の外壁（南面）にあらわれる智拳印像を大日如来と理解するためには、特定の仏の世界を立体曼荼羅化したものという意識をいったんは取り去る必要があろう。そしてここには、「仏頂尊勝陀羅尼」を共通項に、「墓＝塔」および「遺骨＝舍利」という関係性が成り立っている。

なお、「墓＝塔」の結び付きに関し補足するならば、土葬と僧塔の伝統について触れておきたい。霊岩寺慧宗塔（山東省済南市）など、地上に塔を建てその地下に墓を設ける墓例である。韓国の望海寺址東・西石造浮屠（慶尚南道蔚州郡、9世紀末）、高達寺址元宗大師慧真塔（京畿道驪州郡、975年頃）など、統一新羅や高麗初期の浮屠も石棺がともに出土する例が多く、唐代の華北を中心にみられる高僧の土葬と

僧塔の伝統が伝わり、朝鮮半島において用いられていたことが知られる。渤海においても、貞孝公主墓（793年頃）およびその墓塔など、地上に塔を建て、その地下に墓を設ける墓塔葬が報告されている。渤海の本来の葬制ではない墓塔葬が受容された背景には、第三代文王（大欽茂、在位737-793年）が推進した仏教政策によるものとされている⁸。朝陽は漢民族と渤海遺民の定住地であったことから、彼らにより「墓＝塔」を結び付ける伝統がこの地域に残されたとの推測もできよう。

また、墳墓形式の変化と塔の多角形平面プランの出現からも、「墓＝塔」の共通理解をうかがうことができる。朝陽地区の隋・唐墓における墓室形式は、塼築の方形から円形（角弧方形を含む）に移行していく傾向がある⁹。遼代の朝陽地区の漢人墓には方形が認められるが、次第になくなり、一方、契丹人の墳墓には、遼代早初期・前期に円形墓室および木槨が認められ、中期以降に八角形、後期には六角形が出現する¹⁰。現存する遼塔は聖宗（在位982-1031年）・興宗（在位1031-1055年）・道宗（在位1055-1101年）の治世、すなわち遼代中・後期建立とみなされるものが多いが、墓室形式の流れに呼応するように、八角の塔が大多数である。また、遼代後期には、東平房塔（遼寧省朝陽県太平房鎮）のように六角九層（層数は現状において）の密檐式塔が建立されているが、これも六角形墓室の出現に呼応する。このような民族・地域における墓室形式の変化を塔の形式に照らし合わせると、朝陽北塔は、唐代の方形塔をそのまま囲い込んだためというよりはむしろ、この地の漢民族の伝統的墓室形式が投影されていると考えられる¹¹。

そして、共通項として「仏頂尊勝陀羅尼」の効力があげられる。『仏頂尊勝陀羅尼經』において「陀羅尼＝摩尼宝珠」¹²と説かれ、『無垢浄光大陀羅尼經』において「塔＝摩尼宝珠」とされている¹³。したがって、遼塔の機能には、陀羅尼と舍利を奉安する仏塔が同一視され、『仏頂尊勝陀羅尼經』における起塔の勧めを實踐し、『無垢浄光大陀羅尼經』に説く起塔の効力¹⁴により陀羅尼の威力を発揮させることも踏ま

えられていたと推測される。このように、「仏頂尊勝陀羅尼=塔」という理解において、陀羅尼の効力を最大限発揮するための安置場所が必要となり、それは仏陀波利訳『仏頂尊勝陀羅尼經』に「若人能書写此陀羅尼。安高幢上。或安高山或安楼上。乃至安置卒堵波中（中略）彼諸衆生所有罪業。応墮惡道地獄畜生閻羅王界餓鬼界阿修羅身惡道之苦。皆悉不受亦不為罪垢染汚（中略）諸供具華鬘塗香末香幡蓋等衣服瓔珞。作諸莊嚴。於四衢道造卒堵波。安置陀羅尼」¹⁵と説くように、高幢、高山、楼上、塔に安置し、その塔を市中の四衢道に起てることであった。遼塔は、都城址を望む高山、および城址の辻に建立されているが、このような塔の立地場所こそ、遼代の人々にとって、仏頂尊勝陀羅尼の効力を発揮するためのふさわしい場所と理解されていたといえよう¹⁶。

(2) 八大靈塔

次に、第一層塔身にあらわされる各宝塔（図1-6～13）には、「浄飯王宮生処塔」、「菩提樹下成仏塔」、「鹿野苑中法輪塔」、「給孤独園名称塔」、「曲女城辺宝階塔」、「耆闍崛山般若塔」、「菴羅衛林維摩塔」、「娑羅林中円寂塔」という名号が付されている。宝塔の名号をあらわす塔は、朝陽南塔（遼寧省朝陽市老城区、図2）、雲接寺塔（遼寧省朝陽市鳳凰山）、中京大塔（中京城址大明塔、内蒙古自治区赤峰市寧城県、図8-1～4）¹⁷、八塔寺塔（遼寧省義県）、九竜烟塔（白塔峪白塔、遼寧省興城県）¹⁸などがあり、朝陽北塔と共通する。また、朝陽北塔天宮出土の金銀製宝塔（1043年、図9-1・2）¹⁹および地宮の石造経幢（1043年）²⁰にも同じ名号が認められる。

ここにあらわされる八大靈塔について、すでに早くより『大乘本生心地観経』に依拠するものという指摘がされており²¹、近年においては、八大靈塔、八大宝塔について触れる『根本説一切有部毘奈耶雜事』、『十力経』、『八大靈塔名号経』などと『大乘本生心地観経』を比較し、あらためて遼塔における八大靈塔が宋代の法賢訳『八大靈塔名号経』よりはむしろ、唐代の般若訳『大乘本生心地観経』との関係性が強いことについて論述されている²²。確かに先学

の指摘の通り、重熙十三年（1044）紀年のある「羅漢院八大靈塔記」に「心地観経云釈迦在祇園演法之初八大宝塔一切相貌現金色光明中」²³と記されていることから、遼代における八大靈塔の典拠に本経が深く関係していることは確かであろう。

『大乘本生心地観経』巻第一序品に、釈尊の降魔成道においてにわか金色の大光明が発せられ、その大光明の中に「如来不可思議八大宝塔」が出現したことを説く²⁴。その八大宝塔とは、

1. 「拘娑羅国浄飯王宮生処宝塔」（経文に続く偈においては「浄飯王宮生処塔」）
2. 「摩伽陀国伽邪城辺菩提樹下成仏宝塔」（同「菩提樹下成仏塔」）
3. 「波羅奈国鹿野園中初転法輪度人宝塔」（同「鹿野園中法輪塔」）
4. 「舍衛国中給孤独園与諸外道六月論議得一切智声名宝塔」（同「給孤独園名称塔」）
5. 「安達羅国曲女城辺昇切利天為母説法共梵天王及天帝釈十二万衆従三十三天現三道宝階下閻浮時神異宝塔」（同「曲女城辺宝階塔」）
6. 「摩竭陀国王舍城辺耆闍崛山説大般若法華一乘心地経等大乘宝塔」（同「耆闍崛山般若塔」）
7. 「毘舍離国菴羅衛林維摩長者不可思議現疾宝塔」（同「菴羅衛林維摩塔」）
8. 「拘尸那国跋提河辺娑羅林中円寂宝塔」（同「娑羅林中円寂塔」）

とされており、本経序品の偈において説かれる靈塔名号が朝陽北塔ほかに用いられていることは明らかである。

このように、仏蹟をたどる八大靈塔を用いること、塔そのものを多数建立することから、遼代における重要な信仰に舍利信仰があったことが一般的に述べられている。しかし、前述のように、遼代における塔建立は「仏頂尊勝陀羅尼」の効力を発揮させるものとしての塔である。舍利を何に見立て、具体的にどのような効力を期待したのか、考える必要がある。

なお、宝塔はいわゆる遼塔における浮彫モチーフとして頻出する。大宝塔（遼寧省朝陽市鳳凰山）、八棱観塔、双塔寺南塔（遼寧省朝陽県太平房鎮）、塔子山白塔（内蒙古自治区赤峰市寧城県、図7）、上京南塔（内蒙古自治区巴林左旗、図4）、中京半載塔（内蒙古自治区赤峰市寧城県、図6）などのように、名号は付さず、宝塔のみを第一層塔身にあらわす例は多い。また、慶州白塔（図5-1・2）のように、第二層以上の塔身にもみられる例もある。このような多数の宝塔は、弥陀山訳『無垢浄光大陀羅尼經』に「当持呪本置於塔中供養此塔。或作小泥塔満足七十七。各以一本置於塔中而興供養如法作已。命欲尽者而更延寿。一切宿障諸惡趣業悉皆滅尽」²⁵と説かれるように、多くの小塔の造立により延寿と一切の宿障諸惡趣業の皆滅を獲得することを期待したためと考えられる。ここに『大乘本生心地観經』の八大霊塔に帰依することで獲得できる効力²⁶が加わり、尊勝陀羅尼の効力＝塔の効力＝（諸々の塔の代表的存在としての）八大霊塔の存在という関係性が成立する。

しかし、八大霊所や八大霊塔について説く教典はほかにもある。宋代の法賢訳『八大霊塔名号經』においても、「發大信心修建塔廟承事供養。是人得大利益。獲大果報具大称讚」のように八大霊塔を供養すれば増益し果報を得られ、また、「此八大霊塔。向此生中至誠供養。是人命終速生天界」²⁷のように霊塔供養により天界への往生を保証する。八大霊塔を建立する目的は本經においても明確であるが、それにも関わらず『八大霊塔名号經』ではなく『大乘本生心地観經』所収の名号を採用していることは、本經に依拠していることを強調する必要があったためであろう。

3. 重熙年間における朝陽北塔重修、天宮・地宮再葬の背景

朝陽北塔地宮の石函外側の石板および天宮の「令聊記石匣内」に「大契丹重熙十二年四月八日午時再葬像法更有八年入末法故置斯記」とあり、石造経幢の第四層にも「大契丹国重熙十三年歲次甲申四月朔

八日巳亥午時再葬訖像法更有七年入末法」²⁸とあることから、この時期における重修・再葬の目的が、八年後および七年後（1052年）に来たる末法に備えたものであることがわかる。これを前提に、『大乘本生心地観經』の内容を確認しておきたい。

(1) 『大乘本生心地観經』について

『大乘本生心地観經』は、唐代における不空以降の密教僧として活躍した般若が九世紀初め頃に訳出したものである。般若、維摩、法華、華嚴、涅槃等の大乘教典を踏まえ、『金光明經』などが参照されているとされる。

先述のように、巻第一序品第一に八大霊塔について取り上げ、これら八塔を建立し帰依・供養すれば、「若造八塔而供養 現身福寿自延長 增長智慧衆所尊 世出世願皆円満」となり、「若人礼拝及心念 如是八塔不思議 二人獲福等無差 速証無上菩提道」を得られるとし、その効力を強調する。

一方、巻二報恩品第二之上においては、四恩（父母・衆生・国王・三宝の恩）について取り上げる。釈迦から弥勒菩薩への「報恩」について語られ、父母の恩には差別がなく²⁹、報いがたい父母への「報恩」も強調される³⁰。そして、「王失正治若以正化八大恐怖不入其国。所謂佗国侵逼。自界叛逆。惡鬼疾病。国土飢饉。非時風雨。過時風雨。日月薄蝕。星宿变怪」³¹と述べ、恩に報いないことが招く国難に触れ、「仏舍利及仏形像。并諸法僧聖所制戒深生敬信」³²と、仏舍利（仏塔）および仏像への帰依敬信を説く。また、「如是四恩甚為難報。当修何行而報是恩。仏告諸長者言。善男子。為求菩提。有其三種十波羅。一者十種布施波羅蜜多。二者十種親近波羅蜜多。三者十種眞實波羅蜜多。若有善男子善女人。發阿耨多羅三藐三菩提心。能以七宝滿於三千大千世界」³³とし、報いがたい恩に報うためには菩提を求ること、三種十波羅蜜を得ることを述べる。そして、巻第七波羅蜜多品第八において「心地観報四恩品。受持読習解説書写広令流布。如是人等福智增長。諸天衛護。現身無疾。寿命延長。若命終時即得往生弥勒内宮。觀白毫相超越生死。竜華三会当得解脱。十方淨

土随意往生」³⁴とし、本經の受読写經流布により福智増長、諸天の護衛を得、寿命延長し、臨終の後には弥勒宮へ昇天し、竜華三会において解脱を得られ、あらゆる浄土に意のままに往生できることを強調する。

以上のように、『大乘本生心地観經』は、「八大霊塔」に帰依することで得られる効力と「報恩」、為しがたい恩に報いるための「般若波羅蜜多」の効用、それにより得られる国難の除去、本經を流布することにより得られる寿福、最終的には弥勒による竜華三会での解脱・救済と望むままの仏国土への往生を保証するものである。なお、本經の安置場所として、卷大八嘱累品第十三に「在在處處若読若諷。若解説若書写。若經卷所住之處即是仏塔」³⁵とあるように、やはり仏塔となされている点は、前述した陀羅尼の効力を發揮する最適な安置場所としての遼塔の認識に共通するものであり、本經があえて用いられている理由として留意すべき点であろう。本經そのものが「仏頂尊勝陀羅尼」と同じ効力を有するものと理解されたため、第一層塔身にあらわす宝塔の名号は本經に依拠するものでなければならなかったと考えられよう。

なお、陀羅尼の効力として、仏陀波利訳『仏頂尊勝陀羅尼經』には極楽往生の保証を説く³⁶。『大乘本生心地観經』で強調される竜華三会での解脱とともに、数年後に末法を迎える人々にとり、このように具体的に記される行為とその効果は、最も依拠したい考え方であったと推測される。

(2) 遼宗室および朝陽の漢人・渤海人と朝陽北塔

朝陽北塔は、隋文帝（在位 581-604 年）の舍利が納入されている由緒ある塔として認識されていた³⁷。隋文帝は、南北朝の動乱を収束させ、後漢の滅亡以来約 350 年ぶりに中国全土を手中に収めた人物である。北周の武帝による廢仏を回復させ、全国に大興善寺を建立し、仏教流布に貢献した。このような塔に関わることは、遼宗室にとっても多大な利点があったであろう。

国内の有名な古塔の修復は、弥陀山訳『無垢浄光大陀羅尼經』に「迦毘羅城三岐道處有古仏塔。於中現有如来舍利。其塔崩壞汝應往彼重更修理（中略）令汝命根還復増長。久後寿終生極樂界。於百千劫受大勝樂」³⁸と説かれるように、増福増寿と極樂世界への往生を得ることができる功德の一つであり、それにより増益と安寧が得られるとされた。それが文帝ゆかりの塔であればさらに良く、統一王朝の君主として為すべきことであった。

また、「仏頂尊勝陀羅尼」と文殊菩薩の信仰に象徴される五台山信仰についても触れておきたい。山西省の五台山文殊信仰と王権との結び付きについて述べる先行研究は少なくない。唐代八世紀中頃より文殊菩薩の住処とされる五台山に対する信仰が高まり、遼においては燕雲十六州の蔚州に小五台山が設けられ、聖宗や道宗も行幸を行った³⁹。皇帝と五台山文殊信仰を結び付け、仏教にもとづく王権イデオロギーの新たなかたちが創出されたことについても論考されている⁴⁰。聖宗（在位 982-1031 年）はその名を耶律文殊奴と名乗り、「文殊奴」すなわち文殊に帰依したことを示している。契丹人で「観音奴」「弥勒奴」などの名を記す⁴¹ようになるのは、遼代中期以降のこととされる⁴²。聖宗の「文殊」は五台山金閣寺の文殊を指すものであり、時代が下るが、清朝皇帝が「転輪聖王」と「文殊菩薩」として位置付けられることにもつながる⁴³。

朝陽北塔の重修期（11 世紀中頃）における五台山信仰は、聖宗代に確立された仏教的に王権を保証するイデオロギーの一側面を担うものでもあった。そのため、隋文帝にならい統一王朝の君主として果たすべき古塔の重修に着手し、前述のように、古塔の修繕は仏頂尊勝陀羅尼と同じ効力を有するものと理解されていたことから、塔＝古塔の修繕＝仏頂尊勝陀羅尼＝五台山文殊＝仏教的な王権の象徴＝文帝ゆかりの朝陽北塔という理解が、朝陽北塔に関わった契丹族、遼宗室にあったと推測される。

対して、天宮および地宮の納入品には、この大事業に携わった人々の名が散見され、覇州觀察判官、義成軍節度使、彰武軍節度使、彰武軍副節度使、上

京管内僧禄宣演大師蘊珪などの名が認められる⁴⁴。このうち、覇州觀察判官は、遼代において覇州と呼ばれていた朝陽の地元官吏である。朝陽地区は古くから漢人と渤海人の居留地であったことから、漢人の官吏ではないかと推測される。彰武軍節度使は、遼代は上京道臨潢府轄区であり、この職に任ぜられた人物の中には、韓匡嗣、その第五子の韓徳威、第七子の韓徳凝などが列挙される⁴⁵。河北省出身の漢人である韓古知は、太祖代の功臣として名を馳せ、その子である韓匡嗣も、その葬儀にあたり聖宗より葬物が贈られるなど⁴⁶、遼王朝の重責にあった。このことから、東京と中京を結ぶ地域に関わる彰武軍節度使が、有力な漢人の一族により歴任された役職であると推測される。そして、滑州（河南省安陽市滑県）にあたる義成軍節度使は、聖宗の統和三年（985）に「守太子太師兼政事令劉延構為義成軍節度使」⁴⁷とあり、こちらも守太子太師との兼職で漢人の劉延構が任にあっている。

漢民族にとっても、寺院・塔の修復は作善であり、特に『仏頂尊勝陀羅尼經』に説く具体的功德の一つである。そして、その対象が燕代から存続している塔である点も見逃せない要素であろう。その都竜城が置かれた朝陽からは、燕代の瓦や陶器などが出土している。契丹族が独立する遙か以前、この地には漢民族による王朝（北燕）が成立していた。朝陽北塔に象徴される仏教文化は、文化的に先進であるという漢民族のアイデンティティーを支えるものであり、この地に古くから息づいてきたという歴史的足蹟の象徴であったとも推測される。

また、渤海王も、仏教帰依にあたり隋文帝に依拠することがあった。文王（大欽茂、在位 737-793 年）が用いた晩年の尊号が「大興宝曆孝感金輪聖法大王」であったことからうかがえ、この「大興」は隋文帝が建設した大興城および大興善寺による⁴⁸。そして、渤海僧積貞素は、般若による『大乘本生心地観経』の漢訳に携わった靈仙の弟子筋にあたる。靈仙（759-827?）は、804 年に留学僧として入唐し、空海とともに般若に師事した日本の僧である。長安靈泉寺における『大乘本生心地観経』の訳経（810 年）に

際して、靈仙は般若の補佐にあたり、820 年には五台山に赴いている⁴⁹。統一新羅、渤海、高麗、大理、越などの周辺国の仏教信仰の中にも五台山信仰が移植されており、また、朝陽北塔などの八大霊塔の名号の典拠となる『大乘本生心地観経』の訳出に靈仙が関与したこと、靈仙と渤海僧が五台山において関与していたことはたいへん興味深い。

なお、上京管内僧禄宣演大師蘊珪は、『華嚴経談玄决択』を著し、遼代後期における華嚴教学の発展に大きな功績を残した鮮演（1118 年没）とは異なる人物であろうが、朝陽北塔の重修供養に上京の僧侶が関与していたことは留意される。すなわち、朝陽北塔の重修・再葬に関わる一連の行事は、朝陽とその周辺地区の有力な漢人、渤海人が担っていたとしても、中央の意向も反映されたと思われることである。

このように、朝陽北塔は、遼宗室および東京地区に住する漢人・渤海人の双方にとっても象徴的な存在であり、ともに本塔を重修する意義は少なくなかったといえよう。

4. むすびにかえて

以上のように、かつて隋文帝が舍利を納入した朝陽北塔は、遼宗室およびこの地に居住する漢民族・渤海遺民の双方からともにそれぞれの立場で象徴的な存在であった。そして、思想の具現化（造形化）にあたり教学の理論的理解よりも実践的視点が先行する遼代の仏教美術のあり方が垣間みれたようである。すなわち、いわば万能の力を有する「仏頂尊勝陀羅尼」をキーワードに、視覚的に明らかな形であらゆる教えを同一化・還元させようとする方向性である。このような考え方は、シャーマニズムが根底にある契丹族の民族的信仰⁵⁰とも性質的に合うものであったと推測される。朝陽北塔は、契丹人のいわば呪術的な「陀羅尼」に対する適性と、漢人・渤海人に伝わる（五台山信仰を集約した）「仏頂尊勝陀羅尼」信仰、墓塔葬の伝統が結び付いた環境にあるといえる。

朝陽北塔については、神尾式春、島田正郎、関野

貞、村田治郎、竹島卓一など、仏教学・建築学の研究者により早くから着目されてきた。特に塔内納入品が発見されて以降、鎌田茂雄、笹沙雅章、古松崇志など、仏教学の分野において注目を集めてきた。遼の仏教美術については、かならずしも全貌がつかめているわけではない。それは、季節ごとに中京・上京・東京・南京・西京を行幸する遼宗室の特性、契丹族の民族風習を活かした直接支配地（中京・上京地区）の他、漢民族と渤海遺民（東京地区）、漢民族（南京地区）など、その地に根を下ろしてきた民族の風習・伝統を取り込むことにより運営してきた王朝の特性があるにも関わらず、10世紀から12世紀にわたる遼代を、時代の流れに沿った様式編年によりとらえようとしてきたことの弊害でもあろう。このような政治体制であるからこそ、各地域固有の思想的、民族的要素を背景に、造形的伝統が特定の地域において時代を超えて受け継がれ、作品に現れると考える。朝陽北塔を契機とし、中京大塔（内蒙古自治区赤峰市寧城県）、南京地区の天寧寺塔（北京市）など、今後の課題としたい。

註

- 1 朱誠如主編『遼寧通史』第1巻、遼寧民族出版社、2009年12月、「第四節 遼王統治時期遼寧境内の民族」、同 pp.314~315。
- 2 遼寧省文物考古研究所・朝陽市北塔博物館編『朝陽北塔発掘と維修報告書』文物出版社、2007年8月。なお、朝陽北塔が遼代以前の塔の遺構をもとに重修されたものであるとする見解はすでに関野貞により提起されていたが、1980年代に行われた朝陽北塔の発掘調査によりこれが裏付けられた。
 - ・関野貞「満州の古建築と古墳」、『支那の建築と芸術』岩波書店、1933年、pp.357~394。
- 3 比較的近年の論考としては、以下の周旻美氏の各論考および嵩満也氏、向井佑介氏の論考などが主なものである。
 - ・周旻美「遼寧省朝陽地域の遼代仏舎利莊殿研究」、『中國史研究』第53輯、2008年4月、pp.125~161。
 - ・周旻美「遼興宗年間（1031-1055） 仏舎利莊殿殿研」、『中國史研究』第35輯、2005年4月、pp.198~221
 - ・周旻美「遼代八大靈塔圖像の研究」、『中央아시아研究』第14号、2011年12月 pp.141~172。
- ・嵩満也「朝陽北塔発掘調査報告書から見る遼代仏教文化の特色」、『中国北方仏教文化研究における新視座』龍谷大学国際社会文化研究所叢書3、2004年3月、pp.137~156。
- ・向井佑介「朝陽北塔考—仏塔と墓制からみた遼代の地域—」、『遼文化・遼寧省調査報告書2006』京都大学大学院文学研究科21世紀COEプログラム「グローバル時代の多元的人文学の拠点形成」、2006年3月、pp.190~222。
- 4 前掲註3 嵩満也論考、p.145。
- 5 金剛界曼荼羅を立体化させたものとしての理解は、神尾式春氏、村田治郎氏、野上俊静氏など、早くから言及されてきた。
 - ・神尾式春「契丹の仏塔」、『契丹仏教文化史考』満州文化協会、1937年1月 pp.62~77。
 - ・村田治郎「遼系の仏塔」、『満州の史蹟』座右宝刊行会、1944年5月、p.425。
 - ・野上俊静『遼金の仏教』平楽寺書店、1953年9月。
- 6 拙稿「中国・遼寧省におけるいわゆる遼塔の第一層塔身浮彫尊像に関する調査報告」、『金沢美術工芸大学紀要』55号、2011年3月、pp.49~92。
- 7 不空訳『仏頂尊勝陀羅尼念誦儀軌法』、「中央安毘盧遮那仏位。右辺安観自在菩薩位。観自在後。安慈氏菩薩位。毘盧遮那仏位後。安虚空蔵菩薩位。此菩薩左辺。安普賢菩薩位。毘盧遮那仏位左辺。安金剛手菩薩位。金剛手菩薩位下。安文殊師利菩薩位。毘盧遮那仏前。安除蓋障菩薩位。除蓋障菩薩位右辺。安地藏菩薩位」（『大正新脩大藏経』〔以下、『大正蔵』と略記〕19-364下）。
- 8 方學鳳「貞恵公主と貞孝公主の墓について」、『渤海史研究』1、沿邊大學出版社、1993年11月、pp.47~76 および朴亨國「渤海の仏教美術」、『漢字文化圏への広がり』新アジア仏教史10 朝鮮半島・ベトナム、佼正出版社、2010年5月、p.329。
- 9 田立坤「朝陽の隋唐紀年墓葬」、遼寧省文物考古研究所・日本奈良文化財研究所編著『朝陽隋唐墓葬発現与研究』科学出版社、2012年6月、pp.115~144 および前掲註3 向井論考、pp.192~193 など。
- 10 李清泉「真容偶像と多角形墓葬」、遼上京契丹・遼文化研究会編『首届遼上京契丹・遼文化學術検討会論文集』内蒙古文化出版、2009年6月、pp.161~196 および胡健「浅淡遼寧西部地区遼墓発掘及葬俗特徴」、同『首届遼上京契丹・遼文化學術検討会論文集』、pp.157~159。
- 11 朝陽北塔以外に、朝陽地区には朝陽南塔（図2）、青峰塔、雲接寺塔、大宝塔などの方形多層塔が続けて建立されていることから、前掲註3 嵩満也論考に記される理由だけでは理解しきれないであろう。
- 12 仏陀波利訳『仏頂尊勝陀羅尼経』、「此仏頂尊勝陀羅尼。猶如日藏摩尼之宝」（『大正蔵』19-351上）。
- 13 弥陀山訳『無垢浄光大陀羅尼経』、「皆至此処加持彼塔。安仏舎利由加持故。令塔猶如大摩尼宝。是人由此則為已造

- 九十九億百千那由他諸大宝塔」(『大正蔵』19-720下)。
- 14 弥陀山訳『無垢浄光大陀羅尼經』、「或有短命或多病者。応修故塔或造小泥塔。依法書写陀羅尼呪。呪索作壇。由此福故命將盡者。復更増寿。諸病苦者皆得除愈。永離地獄畜生餓鬼」(『大正蔵』19-718上)。
- 15 『大正蔵』19-351中。
- 16 なお、塔が山中にある理由として契丹族の土着の「山岳信仰」に起因するという理解もある。前掲註3 嵩満也論考、p.149。
- 17 中京大塔(内モンゴル自治区赤峰市寧城県)は八角十三層の密檐式塔であり、八方の各角柱部に靈塔名と菩薩名を以下の通りあらわす。
- 東南面・南面隅 「浄飯正宮生処塔」／「観世音菩薩」
南面・西南面隅 「菩提樹下成仏塔」／「慈氏菩薩」
西南面・西面隅 「鹿野園中法輪塔」／「虚空蔵菩薩」
西面・西北面隅 「給孤独園論議塔」／「普賢菩薩」
西北面・北面隅 「曲女城辺説法塔」／「金剛杵菩薩」
北面・東北面隅 「著闍崛山般若塔」／「妙吉祥菩薩」
東北面・東面隅 「菴羅衛林維摩塔」／「除蓋障菩薩」
東面・東南面隅 「娑羅林中円寂塔」／「地藏菩薩」
- 「給孤独園論議塔」が朝陽北塔では「給孤独園名称塔」、「曲女城辺説法塔」が朝陽北塔では「曲女城辺宝階塔」であり、若干の違いが見受けられる。また、これらの菩薩が法賢訳『八大菩薩經』における菩薩名、すなわち「復有八大菩薩摩訶薩。其名曰妙吉祥菩薩摩訶薩。聖觀自在菩薩摩訶薩。慈氏菩薩摩訶薩。虚空蔵菩薩摩訶薩。普賢菩薩摩訶薩。金剛手菩薩摩訶薩。除蓋障菩薩摩訶薩。地藏菩薩摩訶薩」(『大正蔵』14-751中～下)であることについても、前掲註5 村田論考においてすでに指摘がなされている。なお、中京大塔については、藤原崇人氏による次の論考がある。
- ・藤原崇人「契丹(遼)の立体曼荼羅-中京大塔初層壁面の語るもの-」、『仏教史學研究』第52巻1号、2009年、pp.1～25。
- 18 九竜烟塔(遼寧省興城県)の实地調査は行っておらず、八大靈塔の名号の有無については主に前掲註5 村田論考、p.432、王建主編『遼寧寧塔窟』遼寧美術出版社、2002年および前掲註3 周旻美論考(2011年)、pp.154～155による。
- 19 天宮出土金銀製塔(1043年)の塔身部第一重金製筒の八塔名号は次の通りである。
- 「浄飯正宮生処塔」／「菩提樹下成仏塔」／「鹿野苑法輪塔」／「給孤独園名称塔」／「曲女城辺宝階塔」／「著闍崛山般若塔」／「菴羅衛林維摩塔」／「娑羅林中円寂塔」
- 20 石造経幢(1043年)第三層台座の八大靈塔および七仏名号は、前掲註2『朝陽北塔発掘与維修報告書』p.92などに拓本が紹介されており、塔名は以下の通りである。
- 「浄飯正宮生処塔一」／「菩提樹下成仏塔二」／「鹿野苑法輪塔」／「給孤独園名称塔」／「曲女城辺宝階塔」／「著闍崛山般若塔」／「菴羅衛林維摩塔」／「娑羅林中円寂塔」
- 21 前掲註5 村田治郎論考、p.430～432。
- 22 前掲註3 周旻美論考(2011年)、pp.141～172。
- 23 『全遼文』中華書局、1982年、p.159および前掲註3 周旻美論考(2011年)p.153。
- 24 『大正蔵』3-294上～中および296上。
- 25 『大正蔵』19-718中。
- 26 般若訳『大乘本生心地観經』、「若造八塔而供養 現身福寿自延長 増長智慧衆所尊 世出世願皆円満」(『大正蔵』3-296上)
- 27 『大正蔵』32-773上～中。
- 28 前掲『朝陽北塔発掘与維修報告書』、図版72。
- 29 『大乘本生本地観經』卷第三報恩品第二下(『大正蔵』3-297下)。
- 30 『大乘本生本地観經』卷第三報恩品第二下「我為開示於四恩 令入正見菩提道 慈父悲母長養恩 一切男女皆安樂 慈父恩高如山王 悲母恩深如大海 若我住世於一劫 説悲母恩不能盡」(『大正蔵』3-301中)、卷第四厭捨品第三「成就正見不謗三宝。以孝養心恭敬尊親」(『大正蔵』3-306下)など。
- 31 『大正蔵』3-297下～298上。
- 32 『大正蔵』3-300上。
- 33 『大正蔵』3-300中。
- 34 『大正蔵』3-300中～下。
- 35 『大正蔵』3-331上。
- 36 仏陀波利訳『仏頂尊勝陀羅尼經』、「仏言若人能日日誦此陀羅尼二十一遍。応消一切世間廣大供養。捨身往生極樂世界。若常誦念得大涅槃。復増寿命受勝快樂」(『大正蔵』19-351下)。
- 37 地宮題記磚拓片「霸州邑衆諸官同共齐心結縁弟三度重修所有宝安法師奉隋文帝勅葬舍利」、前掲『朝陽北塔発掘与維修報告書』、p.97 図38。藤原崇人「北塔発現文物に見る11世紀遼西の仏教的諸相」、『関西大学東西学術研究所紀要』44号、2011年4月、pp.194～197。
- 38 『大正蔵』19-718上。
- 39 小笠原宣秀「察南小五台山攷」、『龍谷史壇』第24巻25号、1940年、pp.1～12および頼富本宏「五台山の文殊信仰」、『密教学研究』第18号、1986年、pp.93～112。
- 40 田中美絵「五台山文殊信仰と王権-唐朝代宗期における金閣寺修築の分析を通じて-」、『東方学』第117集、2009年、pp.40～58。
- 41 『遼史』卷十八本紀第十八興宗一「冬十一月(中略)癸未殺鉅當不里弥勒奴觀音奴等」。
- 42 島田正郎「遼の社会と文化」、『遼朝史の研究』創文社、1979年、pp.5～59(なお、初稿は1956年10月)。
- 43 前掲註40 田中美絵論考。
- 44 天宮石函東面題記、前掲『朝陽北塔発掘与維修報告書』、p.66 図21 および p.81。
- 45 『遼史』卷七十四列伝第四 韓匡嗣「神冊初、遙授彰武軍節度使」。『遼史』卷十本紀第十聖宗一 統和三年(985)「夏四月(中

- 略) 癸未、以左監門衛大將王庭勗為奉先軍節度使、彰武軍節度使韓德凝為崇義軍節度使」。
- 46 『遼史』卷十本紀第十聖宗一 統和三年(985)「秋七月(中略)甲寅、東幸。甲子、遣郎君班 賜秦王韓匡嗣葬物」。
- 47 『遼史』卷十本紀第十聖宗一 統和三年(985)「秋七月(中略)丁卯、遣使閱東京諸軍兵器及東征道路。以平章事蕭道寧為昭德軍節度使、武定軍節度使、守司空兼政事令郭襲為天平軍節度使、大同軍節度使、守太子太師兼政事令劉延構為義成軍節度使」。
- 48 宋基豪「渤海佛教의 展開過程과 몇 가지 特徵」、『韓國仏教文化思想史』卷上、伽山佛教文化振興院、1992年、pp.698～725。
- 49 小川貫式「入唐僧靈仙三藏と五台^臺」、『支那仏教史学』第5巻3・4号、1942年、pp.137～144、大原正義「『入唐求法巡礼行記』にみる靈仙三藏」、『東アジア比較文化研究』2号、2003年、pp.72～87 および前掲註8 朴亨國論考、p.329。
- 50 前掲註42 島田正郎「遼の社会と文化」、pp.39～42。

付記

今回の実地調査および本稿は、平成24年度科学研究費による学術研究「遼・金・高麗における仏塔の浮彫荘嚴に関する研究」(基盤研究(C)、研究代表者:水野さや)および平成24年度金沢美術工芸大学奨励研究の成果の一部である。

(みずの・さや 芸術学／東洋美術史)
(2012年10月31日 受理)



图 1-1 朝陽北塔 南面



図1-2 朝陽北塔 第一層塔身 南面



図1-3 朝陽北塔 第一層塔身 西面



图 1-4 朝陽北塔 第一層塔身 北面



图 1-5 朝陽北塔 第一層塔身 東面

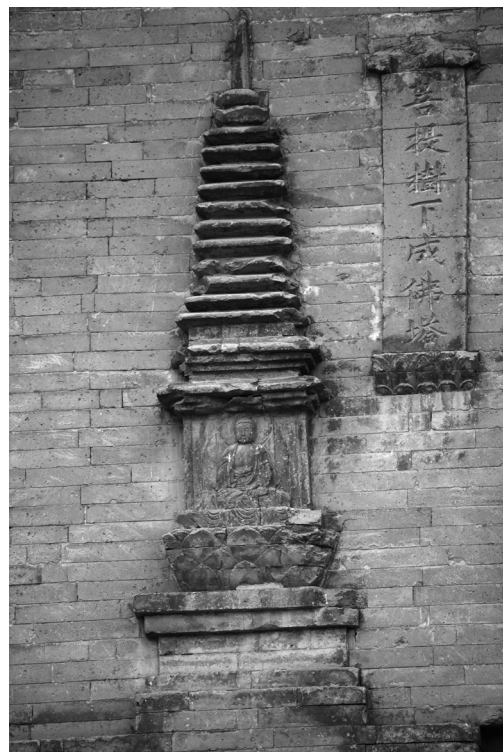


図1-6・7 同 南面 宝塔および名号 「浄飯王宮生処塔」「菩提樹下成仏塔」



図1-8・9 同 西面 宝塔および名号 「鹿野苑中法輪塔」「給孤独園名称塔」



図1-10・11 同 北面 宝塔および名号 「曲女城辺宝階塔」「善闍崛山般若塔」



図1-12・13 同 東面 宝塔および名号 「菴羅衛林維摩塔」「娑羅林中円寂塔」



図2 朝陽南塔（遼寧省朝陽市）



図3 白塔（内蒙古自治区呼和浩特市）



図4 上京南塔（内蒙古自治区巴林左旗）



図5-1 慶州白塔（内蒙古自治区巴林右旗）



图5-2 慶州白塔 第二層塔身



图6 半載塔 (內蒙古自治區赤峰市寧城縣)



図7 塔子山白塔（内蒙古自治区赤峰市寧城県）



図8-1 中京大塔（同 赤峰市寧城県）



図8-2 同 第一層塔身 南面



图8-3 同 東南面・南面隅



图8-4 同 東南面・東面隅



图9-1 朝陽北塔天宮出土 金銀製宝塔



图9-2 同 部分



図 10 - 1 石函（朝陽地区出土）朝陽市博物館所蔵



図 10 - 2 同 上面（青龍面が上側）



図 11 - 1 八稜観塔（遼寧省朝陽県太平房鎮）



図 11 - 2 同 第一層塔身 東面 文殊菩薩坐像